

## 【研究ノート】

## 漂着物の四十年（玄界漂着譚）

1968年－2010年

石井 忠

## 1.花綵列島

日本列島を「花綵列島」と美しく表現する人もいる。花をつづったように東アジアの縁を、アリューシャンから千島・北海道・本州・四国・九州・琉球列島とつづくからである。日本列島だけでも南北三千キロ。海岸の総延長約3万3千キロに及ぶ、まさに四面環海、海の国である。

その列島を囲むように、寒暖（黒潮・対馬暖流・親潮・リマン海流）の海流が海上の道となって流れている。

冬季には大陸から北西季節風、夏季は逆に海から大陸へ南東季節風が吹き、海流に乗った漂着物は、日本列島の津々浦々に届く。（※花綵 はなづな、花を編んで作ったつなのこと）

## 2.流れ寄るもの

民俗学の巨人、柳田国男<sup>(1)</sup>は漂着物を「風と潮の生んだ日本海岸のひとつのローマンス」と称したが、風と潮は南北の文化を運び、日本列島を育んできた。漂着物として実証できる最も古いものは、縄文時代前期、5千5百年前の福井県・鳥浜貝塚<sup>(2)</sup>から発掘された椰子の実である。

明治31年春、柳田国男は愛知県・伊良湖岬<sup>(3)</sup>で漂着した椰子の実、これがヒントとなって晩年「海上の道」を著し、以後、漂着物の重要さを機会あるごとに説き「行く行くは文化史の新しい一面を開くことも」と予告した。さて、鳥浜縄文人は、冬の荒海や台風が去ったあとには、きまって浜を歩いたことは、椰子の実からも推察できる。沿岸に住む人達は、漂着物に期待を抱き「波の音」「風の声」に耳を敲てながら「浜あるき」「灘ばしり」を行なっていたのである。

漂着物は沿岸民に恵みを与えたし、珍奇なものは神や仏として崇められた。大量漂着や赤潮の海を見ると、悪い予兆として畏怖した。海辺の社は



ココヤシの実



伊良湖岬

寄木や寄船で造営されたし、また荒天の海を航行する船を誘き寄せたり、海賊的行為も行われた<sup>(4)</sup>ことは、文献や各地に伝承が残っている。

### 3.海岸を歩く

1968（昭和43）年に糟屋郡柏屋中から新宮中に転勤、古賀市の名糖前近くに家を借り、そこから二人の娘達を散歩に連れていった。娘が拾う貝に熱中し、毎朝、津屋崎までを歩き、日祭日は遠歩きをした。また貝類図鑑<sup>(5)</sup>を買い、貝の名前を調べ、とうとう貝類学会に入会した。頭の中は「貝・貝」だった。学会に入会して、地元福岡に福岡貝類懇話会があるのを知り、主宰の高橋五郎氏<sup>(6)</sup>（タカハシベッコウマイマイ<sup>(7)</sup>の発見者）や佐藤勝義氏、福間町の魚住賢司氏<sup>(8)</sup>等を知り、採集や研究会に参加した。ある日、近くの魚住氏宅を訪ねたところ、貝の膨大なコレクションと見事な展示、整理に圧倒されて、貝採集に限界を感じた。

貝採集は波打ち際とか、漁師の網干場等が好採集地で、かならず目を通す、死殻だけでなく生貝のいい標本が得られるからである。特に波打ち際は、風と潮に運ばれた動植物や異国からの生活用品、いわゆるゴミが多くあり、それらのものも注意してみてきた。

特に佐藤勝義氏は旧軍出身で戦時にはヤップ島守備隊として在島、南方産と思われる漂着果実や種子などを持参し、見てもらったり戦時の話を聞いたりした。

### 4.諸の百科事典

貝採集は続けるものの、次第に漂着物に目が移っていった。フィールドワークは志賀島から遠賀郡・芦屋までの約56キロで、それを15-20キロと区切り、2, 3ヶ月で全コースを歩き、それを繰り返していく。古賀、福間、津屋崎は早朝か夕方、一日のうちどこかで歩いた。採集、記録、写真を撮った。海亀、イルカ、鯨骨、南方果実類をはじめ、分からぬものは、大学<sup>(9)</sup>、特に戦前の南方を知っている先生に手紙を出し同定を受け、また標本類を持参して見てもらった。民俗学では谷川健一先生や故宮田登先生、国立民族学博物館館長の故梅棹忠夫先生、九大名誉教授の故中村正夫先生等にはずいぶんとお世話になった。谷川先生からは、漂着物を「諸の百科事典」という言葉をいただいた。

### 5.漂着物との四十年

先述したように、1968（昭和43）年に新宮中に転勤になり、海岸歩きをはじめ、貝殻の採集から、貝掘り、イカ（ソディカ）拾い、若布（若芽）など海からの贈物にも夢中になり、海亀やイルカ等の死骸が漂着しているのを計測したり、写真に撮ったり、埋めて骨格標本をつくった。自分が面白いと感じたものは、すべて収集した。



玄界灘 勝浦浜

### 5-1.1970年（昭和45年）

1970（昭和45）年は、私には忘れられない年だった。1970（昭和45）年3月31日、玄海町の浜を歩いていた。昼食に立ち寄った食堂のテレビは、日航機よど号がハイジャックされたことを報じていた。大変なことが起ったと海岸歩きをやめて急いで家へ帰つたら、よど号は13時59分に福岡空港から朝鮮にむけて飛び立った後だった。各局のニュースは、ハイジャックでもちきりであった。この年の11月には、三島由紀夫事件があり、日本中に大きな衝撃が走った。

12月には私が拾いたいといつも海岸歩きで念じていた「生きている化石」“オウムガイ”を玄海町と津屋崎の浜で拾った。最初に拾った玄海町江口では、強烈な北風、小雪混じりの大荒れの天候だった。何か予感するものがあったのか、その日は年休をとっての海岸歩きだった。

波打ち際に割れたオウムガイが転っていた。私は大声で「拾った、拾った」と叫んでいた。1ヶ月前に佐藤勝義氏<sup>(10)</sup>が糸島郡・深江（現糸島市）で拾っていたので、その夜、氏に手紙を書いた。その日、江口の浜には他にアカウミガメの死骸やココヤシも漂着していた。その暮れの31日には津屋崎・白石浜の農業排水溝のところのゴミが大量漂着する場所で1個採集した。70年は激動の年であったが、私にとっては念願のオウムガイを2個も拾ったのである。オウムガイはそれから1981年の11年後に3個目を拾った。



ソデイカ



オウムガイ

### 5-2.1965年（昭和40年）

1965（昭和40）年の貝類雑誌「ヴィナス」<sup>(11)</sup>に浜田隆士博士が江戸時代以降、日本に漂着したオウムガイをまとめている。それだと日本列島には30数例であったが、近年は海岸歩きをする人も多くなり、本土でも数十個が拾われ、沖縄、先島では百個以上が採集されている。生きたオウムガイ<sup>(12)</sup>は1986（昭和53）年、鹿児島・開聞町川尻の定置網にかかったものが2ヶ月間、水族館で生きていた。近年は石垣や与那国島で幼貝や、破損していない表面に火災彩も鮮やかで、巻き込みは真黒なものも採集され、温暖化の影響で、フィリピンなどの生息地から次第に北上しつつあるように感じられる。ニューギニア海域に生息するヒロベソオウムガイ<sup>(13)</sup>は沖縄県・小浜島や石垣島でも採集されている。

### 5-3.1973年（昭和48年）

1973（昭和48）年にセグロウミヘビ<sup>(14)</sup>を古賀市花見浜ではじめて見つけ、1973－75年まで3匹があがつた。爬虫類ヘビ目溝牙蛇科、生息はインド洋から太平洋の暖海に分布、南北日本列島の海域からも採捕されている。10月は神無月、出雲では神在月というが、八百万の神様が出雲へ集まり神議があり、出雲の稻佐浜へ神迎えの神事が行なわれる。この時、セグロウミヘビ（竜蛇）が神々を先導する役割を担う。ウミヘビを採集したので、12月には竜蛇信仰のある出雲・石見地方を巡ってきた。

### 5-4.1974年（昭和49年）

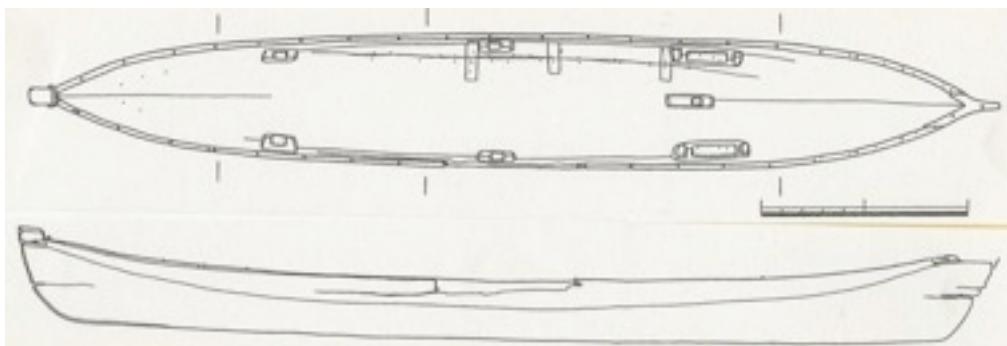
1974（昭和49）年12月、長崎県・松浦高校の池崎善裕先生から手紙をもらった。松浦海岸に漂着したオサガメ<sup>(15)</sup>を解剖したところ、大量のビニールを食べ、それが食道に詰ったことが、死因であることが書かれてあった。早速学校を訪ねて話を聞き、詰っていたビニールを見せてもらった。ビニールに印刷された文字はみな日本語で大変ショックだった。オサガメはクラゲやサルパ（※サルパ目サルパ亜目の尾索類）を食べるが、漂っているビニールをクラゲと間違えて食べていたのであった。そういえば、そのころ大量のビニール類の漂着の多さが気になっていた頃である。玄界灘海岸に漂着する海亀<sup>(16)</sup>は、オサガメ、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ<sup>(17)</sup>等5種があり、アカウミガメは、福津市恋の浦、勝浦浜、遠賀郡・岡垣浜に産卵にあがる。福津市にはウミガメ課もあり、ウミガメに対する保護は市民と共にになっている。1987（昭和62）年6月に福岡市・海の中道でウミガメの這った跡を見つけたが、卵は掘られてなくなっていた。

岡垣浜に丸木舟が流れついたということを芦屋の人から聞き、その所在を探していたがなかなか分からなかった。1982（昭和57）年になって、同郡岡垣の久世という料亭の生簀の上に置いてあることが分かった。久世は小役丸卯太郎（1922－2000）氏経営である。発見者の小役丸氏に伺ったら、春に汐入川のところに半分砂に埋もっていたという、全長4.65m、最大幅62cm、高さ最大30－40cm。断面は舟首、舟屋がV字形をし、中央部はU字形となっている。舷があったと思われるが失われたようで、木釘で止められた痕跡が残っていた。また内部に鉄釘のあとのがれがある。舟首から見ると左側に長さ約66cmの亀裂があるので、それをふせたようなあとが残っている所があり、そこに鉄釘の跡が集中している。内部は左右に向かい合う3個、計6個の差し渡しを受入れる割り残しの突起があり、また中央から舟屋側に66cmに幅37－40cmの前者の2個より広い差し渡



セグロウミヘビ（尾部の波状模様が特徴）

しがある。その中央に  $3 \times 4$  cm のくりこみがあり、帆柱をたてる柱受状のものが見られた。巨大なラワン材を割り抜いて、この丸木舟は作られている。樹種は愛媛大学の原田光教授らによって、広葉樹の南洋材でフタバガキ科のレッドラワングループに属するという。同形の舟はインドネシア・スウラウシエ島に見られる。北九州市立いのちの旅博物館に寄贈。



岡垣浜に漂着したラワン製丸木舟

### 5-5.1988年（昭和63年）

1988（昭和63）年4月14日、アカウミガメが古賀浜にも産卵、卵をマリンワールドに移したが、無精卵であったという。ヒメウミガメは、1980（昭和55）年、福津市・勝浦浜で死骸が漂着、日本では漂着例の少ない海亀である。

1987（昭和62）年7月、塩屋鼻沖1500mのところで底引網に鯨の椎骨がかかった。8月15日が過ぎると西方丸が白石浜、勝浦浜に多く漂着した。手造りで装飾をほどこした豪華なものが多かった。以後、手造りの西方丸は少なくなり、発泡スチロール製に代わった。75年から87年まで、南方のホウガンヒルギ（センダン科）の漂着が多く観察された。

1987（昭和62）年11月8日、白石浜から勝浦浜を歩いていたら韓国製の牛乳パックが漂着、パックの日付は10月28日で、11月8日に漂着したしたがパックには消息不明の少年を探す写真入だった。今思えば拉致<sup>(1)</sup><sup>8)</sup>であったのであろう。日本人の拉致もこの頃あっている。

1988（昭和63）年9月19日に福間・北原の浜にカメの子が孵化、大部分は海に泳いでいったが、うち10匹が配水管から道路に出て、通りかかった車に引かれている。連絡を受け見に行つたが、4センチほどのアカウミガメであつ



漂着した手造りの西方丸



牛乳パックの少年画像

た。1990（平成2）年11月から12月には、緑色したオヒルギ（蛭木・オヒルギ・メヒルギ）が多く漂着した。

1991（平成3）年8月に沖縄を旅し、知念村の浜でアメリカ・南カリフォルニアから流したビンが漂着していた。二年半かけて北赤道海流に乗ってたどり着いたものである。このビンは、カリフォルニア沖から360本流した一本であった。早速流したアメリカ人に連絡をした。

### 5-6.1991年（平成3年）

1991（平成3）年12月21、22、23日に福井県小浜から京都府・函石浜<sup>(19)</sup>・久美浜の海岸を歩いた、福井県鳥浜貝塚の出土遺物を見学した後に、京都府函石浜の海岸を歩いたが、ガラス製浮子や、ソ連製の鉄浮子等が漂着していた。この砂丘地帯にある函石浜からは弥生時代の遺物や青銅製銅鏡が昭和初期ごろ直良信夫によつて採集されている。松林の中に記念碑が建っていた。浜で漂着している陸亀を発見。甲羅にハングル文字が書いてあったので、持つて帰ろうとしたが腐敗がひどく断念。

1992（平成4）年6月28日、九州・沖縄水中考古学会が行った長崎県・鷹島<sup>(20)</sup>の海底遺跡調査に参加。会員は水中に潜ったため、船に残っていた。午後から周辺の海岸を楠本正氏らと歩いた。その時はちょうど干潮時で、引いた砂利の中をよく見ると大量の陶磁器片が見えてきた。また、元船の煉瓦や硯等も採集。その中にフジツボの付着した半円の陶器を見つけた。中には赤褐色の石化した泥がつまっていた。これがその後福岡市の文化財課に運ばれ分析。蒙古襲来絵詞

<sup>(21)</sup>に描かれている“てつはう”ということが判明した。その後鷹島の海底調査でも完形のものが引き上げられているが、中に物がつまつたものはまだ引き揚げられていない。いずれ完形の中に鉄片が詰まったものが発見されるだろう。現在国立九州博物館に展示されている。思えば7百年前、鎌倉武士を震撼させたものである。

1993（平成5）年12月23日、西郷川の北原でタイマイ（鼈甲）30×24cm、重



アメリカからの漂着ビン



てつはう

き 2.6 kg の死骸を発見。甲羅を標本、頭部四肢はホルマリンにつけて保存した。

1994（平成6）年4月15日、福間花見浜でクジラのようなものの一部が海藻にくるまって漂着、骨の一部が見えたので、解体して椎骨、椎板等をとる、鯨の名称や部位は分からぬ。

1994（平成6）年11月19日、白石浜にオサガメが漂着。甲羅を計測したら150 cmあった。11月30日、博多湾でメガマウスザメが漂着。世界で7例目。体長4.7 m、体重790 kg。2011（平成23）年1月に三重県の定置網に生きたものが捕獲されたとテレビで報道されていた。生きたものは世界初という。博多湾で漂着したものは前日に湾内で泳いでいるのが目撃されている。プロジェクトを組んで解剖、その後、標本としてマリンワールドの目玉になっている。

1995（平成7）年1月にアオイガイの漂着が多く見られた。またこの年にはエチゼンクラゲ<sup>(24)</sup>が玄界沿岸に漂着した。コウモリ傘ほどの大型で、重量は100キロ以上、これが数匹網に入ると、その重さで網が破れ、漁業に大きな被害を与える。エチゼンクラゲは黄海あたりで発生し、玄界や日本海へ、一部は瀬戸内海でも捕獲されている。



アオイガイ

### 5-7.1996年（平成8年）

1996（平成8）年1月12日、福間漁港近くに長さ5mほどのミンククジラ<sup>(25)</sup>の死骸が漂着。死後1週間ほど経過していた。住民が出刃包丁等で肉を削り取って持ち帰っている。その後、漁協で解体。沖に投棄した。私がこのニュースを知ったのは夜だった。砂浜に埋めて骨格標本を探ることを考えなかつたのであろうか。大変残念だった。5月11日に散歩コースの浜（福間花見浜）にアカウミガメの死骸が漂着。死後あまり経過してなかったので、すぐ家に戻り準備をして解体。胃には海藻とビニールの糸状、長さ20cm、5cm、4cmの3本、ビニール袋の小片だけだった。これが直接の死因ではないようである。解体中に海岸歩きの人なども寄ってきた。こちらは血と匂いとで、気分が悪くなりそうになった。終わって見物者と一緒に松林の中に運んで、標本をとるために埋めた。1996（平成8）年6月ごろ、奈多漁港に浮いたり沈んだりしている丸木舟らしいのが目撃され、9月1日に志賀島沖で漂流中の丸木舟を、漁師によって引き揚げられた。断面はU字型、内部はノミで削った跡がはっきりしていた。一部木片を愛媛大学に送って樹種を調べてもらったらトドマツ<sup>(26)</sup>ということであった。トドマツは北方材である。引き上げられ3年間ぐらい現場に放置されていたが、譲り受け福間の教育委員会が今保存している。舟は長さ5m弱。未製品であろう。6月に志賀島の勝馬にベトナムの竹籠舟<sup>(27)</sup>が漂着。近くの浜幸屋の上田征一郎氏が、自宅の裏の浜で発見。長さ4m、幅170cm、竹を細く割いた、網代編みで、楕円形としている。全体にペンキを塗り、底部にはコールタールを塗って水漏れ等を防いでいる。竹籠舟は昔はココヤシの油と牛糞を混

ぜて塗り、目をつぶしていたという。古事記や日本書紀のマナシカタマ（無目籠、無目堅間小船）等の記載があるが、これを籠とするか、舟とするかは紀の場合、記載が異なっている。まだ現在のところ考古学の発掘は竹籠舟の報告は知られていない。このベトナムの竹籠舟は楕円形（笊形）と、円形のものがある。円形のものは一寸法師の舟と呼ばれている。

1996（平成8）年12月15日には白石浜でイノシシの頭部が漂着していた。玄界沿岸でイノシシが出没。市街地に入ったり、列車に衝突する等多発していた。2004

（平成16）年には津屋崎の山手から、海岸に出て福間や古賀の松林をかけぬけて、松林中を散策中の古賀市住民三人に傷をおわせて、新宮町湊付近の山中で射殺されている。猪の死骸や、頭骨も玄界沿岸で多く漂着している。



ベトナムの竹籠船

### 5-8.1998年（平成10年）

1998（平成10）年8月11日に下関方面を歩いていたら、横野の海岸で異様に多い漂着物が目についた。多くの漂着物にフジツボやエボシガイが付着している。そしてほとんどのものが中国製品だった。6月に中国の長江<sup>(34)</sup>で、今世紀最大という大洪水がおこっていた時である。この大洪水で中国のトップが海外に行っていたのを急遽帰国して、その対応に迫られている。8月27日には福間、津屋崎・白石浜・勝浦浜を歩いたら、大量の漂着物、11日に下関で見たものと同じであった。8月の炎天に付着物は腐敗し猛烈な匂いを漂わせていた。ココヤシ、瓶類、ペットボトルや流木、建物片、樹木、ライター等大量漂着。玉を抱く獅子の木彫りは、台湾のものであろう。その頃には新聞も報じていたので、8月の29日に鹿児島・吹上浜の海岸を歩く。海水浴場・漁港のあるところは清掃車やボランティアがでて、ほぼ流木など焼却がすんでいたが、人気の少ない場所には漂着物はそのままであった。吹上浜<sup>(35)</sup>は以前に数回歩いたが、今回浜を歩いたら「不審者」の注意を呼びかける掲示やビラが多く目についた。ここでも「拉致」が行なわれたからである。吹上浜は、道路や人家から遠く離れていて、北朝鮮の工作員たちが徘徊や潜伏をして機会を狙っていたのであろう。

1998（平成10）年12月14日、10月から毎晩夜8時ごろから津屋崎まで歩いた。ソディカを拾うためである。雨・風も厭わず浜を歩いた。この日は満月であったが、干潮で花見の波消しブロックのところに出たら、ソディカの体が青白く浮かんでいた。付近をみるともう一杯を確認。護岸の中に一杯を隠して、一杯を抱いて家に帰る。二杯目を運ぶた

め自転車に乗っていったが、もう一度浜を見たら一杯漂着。約1時間のうちに4杯を拾った。一晩でこの数は今迄になく、家内も「こんなに拾うてどうするとね。」翌朝計測、写真撮影をして半日かかって解体した。20軒ほど配った。解体中にこの分厚いところと、内臓の部分に寄生虫アニサキスを検出。ホルマリンにつけて保存。

1998（平成10）年2月21日に福間北原浜に約100kg、長さ1mほどのマンボウが<sup>(28)</sup>漂着した。マンボウの漂着は古賀市でも2003（平成15）年花鶴川河口で漂着。内臓部分が切り取られていた。マンボウには、生肝が病気にいいという俗信のためという。2011（平成23）年1月に古賀浜に100キロほどのが漂着している。

1998（平成10）年2月3日、福間花見浜に大量のブンブク（棘皮動物）<sup>(29)</sup>が大量漂着。歩く時に気をつけたが踏み潰す音がなんとなく気持ちが悪かった。



マンボウ

### 5-9.1998年（平成10年）

1998（平成10）年2月27日－3月にかけて、西郷川の北側にあった漁師小屋の撤去作業が行われた。ブルが入って古い漁具や網などを壊して、ダンプでどんどん運んでいく。教育委員会に連絡して、漁具の一部は運んでもらった。滑石製の沈子<sup>(30)</sup>や土製錘は、拾ってきた。石製錘は昭和30年代まで、立花山・三日月山付近で滑石を採取して、現場で加工したものである。

3月3日夜イカ拾いのため海岸を歩いていたら、北原浜の波打ち際にキツネが漂着していた。花見の松林まで持つていき、翌日、写真撮影。終わって埋めた。一年後に頭骨部分を標本として掘出す。ホンドキツネ<sup>(31)</sup>である。首に鉄製針金が巻きつけられていたので捕殺後海へ捨てられたのである。民話には福間のオサンキツネが登場するが、キツネは近年、ほとんど人の目に触れることがない。12月21日に福間花見の東（北）20mのところに、バカイカ（正式名称）が漂着。ソデイカもバカイカとかいうし、アカイカともよんでいるが、こちらのバカイカが正式名称で、どうもソデイカ<sup>(32)</sup>と混同されている。体系は、スルメイカ形のもので、長さ49cm、重さ5kgあった。

1月8日に、花見海岸にシュモクザメの幼魚が数匹あがっていた。網にかかったものを福間の漁師が捨てたものであろう。標本にしようと手にとって見て、その臭いこと。なかなか匂いがとれず何度も砂と海水で洗った。結局家で石鹼をつけて洗い、やっと匂いが取れた。

## 5-10.2001年（平成13年）

2001（平成13）年8月に、古賀・福間・新宮の沖に、巨大なシュモクザメが遊泳しているのをサーファーが発見。空にヘリ、沖に巡視船も出て監視をした。海水浴シーズンだったので、海水浴業者は大きな打撃を受けた。サメと聞けば多くの人があの「ジョーズ」の人食いざめを思い出す。

2001（平成13）年ごろから冬になると、玄界沿岸の各所で韓国や中国のポリタンクが漂着する。新聞によれば「日本海沿岸にタンク1万個（2003.3.20）。タンクは蟻酸や過酸化水素等の漁具やノリの漂着剤・消毒殺菌剤等に使われるもので、年々増加、日本海、玄界沿岸では数万個に及んでいる。

2001（平成13）年8人の仲間と漂着学会を立ち上げた。事務局を高知県黒潮町に置いた。2002年第2回は古賀市で行い、2010年福岡大会を海の中道で行った。会員230名、会報『どんぶらっこ』は35号、学会誌は8巻となった。

2002（平成14）年2月26日には恋の浦<sup>(36)</sup>にオオギハクジラが漂着。体長4.7m。近年日本海側に漂着が目立っているという。この鯨の実態はあまりよく分かっていない。

この年にはカツオノエボシ<sup>(37)</sup>が古賀、福間浜に大量漂着。黒潮本流に見られるが、玄界側は初めて見た。有毒なクラゲである。

10月29日には古賀花見浜に、大量のギンカクラゲ<sup>(38)</sup>とルリガイが漂着した。紫色の殻は高貴な色をおび、貝から発する泡に本体はぶらさがり、気ままな旅をする。別名「さまよえる旅人」

2003（平成15）年2月14日。山口県角島に北朝鮮の船が座礁。日本の中古自転車を積載していた。その後、自転車を積み替えて座礁船を放置して退去。放置された船を見に行つたが、怒りがこみあがってきた。

5月27日、宗像歴訪の会で、北九州市藍島へ。西側の浜で漂着した男性死骸を発見。波打ち際にマネキンのようにあおむけになって横たわっていた。会員一同「ギャーッ」。死体に外傷などはなかった。北九州市の警察に通報。1980

福津市勝浦浜海岸のポリタンク



（昭和55）年、宮司で下半身を見つけたことがある。

2006（平成18）年11月ごろから海岸に医療系統薬物の漂着が目立つ。海岸にはポリタンクや薬物に注意する看板が各所に立てられた。

2007（平成19）年1月に福津市白石浜に漂着したユウガオ<sup>(39)</sup>（ヒヨウタン）を、宗像市の神田哲氏が持参、割れて海水が入っていたが種子を取り出し、4月に播いてみた。どんどん成長。夏は夕方になると、白い花が咲いていた。庭中の木につるがからみ、葉で被われたが、隠れるように1個実をつけていた。その種子を2008（平成20）年4月に播き2個がみをつけた。2009（平成21）年にも種子を取り出し播き、毎日水をやり肥料を与えてたところ、4個が実った。2010（平成22）年にも播いたが、花も咲いたが実はつかなかつた。酷暑のせいだろうか。



漂着種子から発芽した夕顔

2007（平成19）年に心臓手術をして、近年海岸歩きは減少、種子を播いて発芽を試したり、資料の整理が多くなった。

2003（平成15）年ごろ、福岡市内の園芸店で、種子から10cmほど芽が出ていたケベレラ<sup>(40)</sup>を千円で売っていた。これはキョウチクトウ科に属するもので、原産は東南アジアの熱帯圏である。シンガポールに行ったときには街路樹として植えられていた。また、果実も玄界に漂着する。少しずつ成長し、鉢に移し、土や肥料を入れて、夏は外に出し、冬は部屋に入れて大事に育てた。いつの間にか2m以上にもなった。2007（平成19）年の夏には白い花が2、3個ついた。2009（平成21）年の夏には全体に花が付き、10月上旬に最後の花が終わった。1cmの小さな実が1個付いていた。

腐れないように祈る毎日だった。11月に実がとれた。長さ4、5cm、緑色をし、白い斑点状のものがつき、縦に浅い筋状になっている。7年目にして実が付いたのには感動した。今年（2011年）の冬は外に出したが、寒さに葉がしなだれています。

10月には、宮司浜にグンバイヒルガオ<sup>(41)</sup>が観察された。

2009（平成21）年7月18日、福津市花見の刈目川近くの波消ブロックでサケガシラが漂着していた。体長1、13m、幅12cm、エタノールで保存した。

## 6.漂着植物の変化

40年の熱帯植物<sup>(42)</sup>の変化について述べておこう。『名も知らぬ遠き島より、流れ寄る椰子の実ひとつ』海岸歩きで、かならず拾ってくるのはココヤシであった。どんな小さな部分でも、見つけ、拾ってきた。ココヤシだけでも700個は袋に入れて持っている。「一個あればいいっちゃないと」と家内は言うが、これだけはこだわった。ココヤシは果実と果皮と区別した場合は、海岸歩きを始めた頃は、果皮の割合が果実よりも圧倒的に高かつたが、次第に果皮の割合が減少し、2008年、2009年では、果実の割合が90%以上となつた。この理由としては、流出源である東南アジアの国々で果実の中身を取り出した後、果皮

が海に捨てられていたが、次第に投棄することが少なくなったためと解釈できる。しかし果皮が少なくなったばかりでなく、果実の漂着量が増加しているのはそのことと関係はない。同じように増加しているものにはモモタマナとゴバンノアシがある。モモタマナは海浜にも生育しているが、街路樹として盛んに植栽されるようになった。それによって果実が側溝や下水から川や海に流出するようになったと考えられる。ゴバンノアシとココヤシは熱帯の海浜に優占林を形成しており、海面の上昇や海岸浸食によって汀線が生育地に接するようになり、落下した果実が直接、海に出ることが多くなったものと思われる。サキシマスオウノキ、ミフクラギ（キヨウチクトウ科）、モダマ（マメ科）の漂着が多くなったのも、同じ理由によるものと考えられる。

一方、最近になって減少傾向にあるのはニッパヤシ（ヤシ科）とホウガソヒルギ（ヒルギ科）である。ニッパヤシの果実の漂着量は1979年ごろまで多かったが、近年では滅多に漂着することはない。かつてニッパヤシは大量漂着が見られ、1975年3月に福岡県海の中道の7.3kmの海岸で46個を、中西弘樹氏（長崎大学・現漂着物学会会長）は1979年3月に愛知県常滑市の3kmの海岸で27個の漂着を確認している。私は歩き始めて、1984（昭和59）年4月までに320のニッパヤシを採取している。しかし最近はこのような現象は全く知られていない。ニッパヤシやホウガソヒルギは東南アジアのマングローブ湿地の中に生育しており、栽培はされてはいない。マングローブ湿地の開発により、それらの植物種の生育地が減少しているのが原因ではないかとも考えられる。以上のように日本本土への熱帯起源の漂着果実と種子は、海面上昇や海岸浸食、マングローブ湿地の開発による自然破壊が影響していると考えられ、したがって、地球規模の環境問題を反映していると言える。

まだたくさんの事があるが、紙面の関係で割愛した。漂着物を手に取り、記録を開くと、昨日今日のように思い出される。それにしても40年間、確実に自然も環境も後退している事だけは言える。

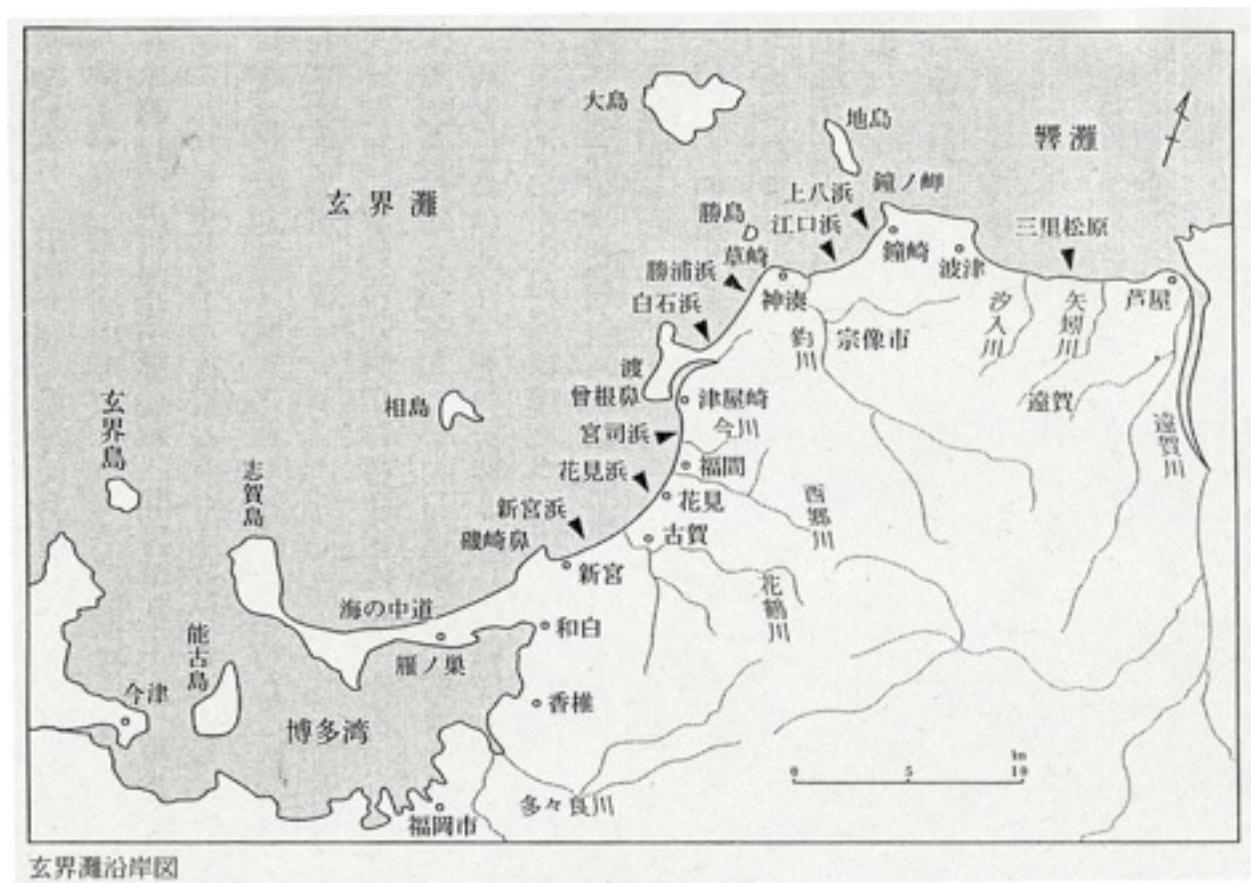
## 注

1. 柳田国男 民俗学者「遠野物語」「海上の道」1875-1962
2. 鳥浜貝塚 福井県三方郡鳥浜貝塚
3. 伊良湖岬 愛知県伊良湖岬、柳田国男「海上の道」（1952）
4. 宗像大社寛喜三年の文書「宗像大社の本末社七十会社の造営・修理が芦屋から新宮湊まで48キロの間に打ち上げられた漂着物で行われた」
5. 貝類図鑑 波部忠重、小管貞男「貝」保育者（1967）
6. 高橋五郎 高橋五郎、岡本正豊「福岡県産貝類図録」（1969）
7. 佐藤勝義・石井忠「玄界灘に漂着したオウムガイ」ちりばたん6-6、日本貝類学会
8. 魚住賢司「福間町の貝類」福間町史、自然編1（1998）
9. 戦前の南方植物 渡辺清彦、村田弘之、瀬川弥太郎
10. オウムガイ 石井忠「11年ぶりに漂着したオウムガイ」「ちりばたん」12-2（1981）
11. 貝類雑誌 日本貝類学会誌、ヴィナス、ちりばたん
12. 生きたオウムガイ 小畠郁生、加藤秀「オウムガイの謎」（1987）
13. ヒロベソオウムガイ 中西弘樹、海流の贈り物 平凡社（1990）

14. セグロウミヘビ 上田常一「出雲の竜蛇」(1972)
15. オサガメ 海産のカメ、甲長2メートルに達する、背甲に7本、腹甲に5本の縦に隆起がある。熱帯、亜熱帯の外洋
16. 玄界灘海岸に漂着する海亀 土本で産卵するアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイ、ヒメウミガメ、オサガメの五種
17. ヒメウミガメ 1993年12月4日 津屋崎町、勝浦浜で嶺井久勝氏によって発見、マリンワールド保存
18. 拉致
19. 京都府・函石浜 直良信夫、近畿古代文化論考 木耳社(1991)
20. 長崎県・鷹島 石井忠 蒙古襲来絵詞の“てつはう”漂着物学会誌第3(2005)
21. 蒙古襲来絵詞 肥後国の住人、竹崎李長の文永、弘安の役の自身の戦功をあらわす。絵巻、鎌倉中期頃。“てつはう”的描写がある。
22. タイマイ ウミガメ科のカメ、甲は、黄色と黒色の不規則な細斑がある。甲は鼈甲(べっこう)として、装飾品に製作、絶滅危惧種
23. メガマウスザメ メガマウス科のサメ(軟骨魚、全長5メートル)  
深海性のサメで実態が不明だったが近年採捕されている。その後、日本で3ヶ所、捕獲や死骸があがっている
24. エチゼンクラゲ ビゼンクラゲ目の鉢虫類、直径1メートル、重さ150kg、東シナ海から日本海へ流入
25. ミンククジラ ヒゲクジラ類ナガスクジラ科、全長10メートル前後コイワシクジラ
26. トドマツ 櫻松、普通にはアカトドマツ、北海道北部、カラフトに自生
27. 竹籠舟 ベトナム、ハロン湾や運河等で使われる4mほどの竹で編んだ舟。郷司正己、ベトナム海の民 新泉社 2003年
28. マンボウ フグ目 まんぼう亜目 まんぼう科
29. ヒラタブンブク 棘皮動物 海胆綱
30. 滑石製沈子 (ちんし・おもり) 漁業用のおもり 石井忠 寄物の考古学4. 石錘 福岡考古懇話会18号 1999
31. ホンドキツネイヌ科 キツネ属 ホンドキツネ
32. ソデイカとバカイカ ソデイカをバカイカとも呼んでいる
33. シュモクザメ ハンマーHEAD・シャーク 撃木(しゅもく)は鐘を打ちならすT字形の棒
34. 長江大洪水 平成10年(1998)6月から揚子江(長江)の大洪水被災者、2億数千万人、20世紀最大の洪水
35. 吹上浜 鹿児島
36. オオギハクジラ 西脇富治 鯨類・鰭脚類 東京大学出版会 1965
37. カツオノエボシ 刺胞動物門ヒドロ虫綱管クラゲ目 カツオノエボシ科
38. ギンカクラゲ 日本近海にも分布するギンカクラゲ  
荒俣宏 水生無脊椎動物 平凡社 1994
39. ユウガオ ウリ科の蔓性一年草 カンピョウ
40. ケベレラ キョウチクトウ科
41. グンバイヒルガオ ヒルガオ科の多年草 世界の熱帯海岸に広く分布
42. 中西弘樹・石井忠 「日本本土における熱帯起源の漂着果実と種子の40年間の変化」漂着物学会誌 第8巻 2011

石井 忠 漂着物の博物誌 西日本新聞社

- 石井 忠 寄物の民俗誌 新潮社  
 石井 忠 漂着物事典 海鳥社  
 石井 忠 新編 漂着物事典



玄界灘沿岸の地名